



OVERSEAS

Republic of Tunisia

—チュニジア共和国—

海外事情



チュニジアの南部



宮本 健吾 MIYAMOTO Kengo

八千代エンジニアリング株式会社 / 技術推進本部 / 技術開発部 / 企画開発課

チュニジア南部

北アフリカに位置し地中海に面するチュニジアは、縦長の形をした国土の東西中央をテベッサ山地が通り、この山が隔てる南北で気候や景色は大きく異なる。北部は地中海からの湿った空気が山で留まり降雨をもたすが、南部はその逆に日が強く乾いている。衛星写真で見るとよく分かるが、北部は木々の緑色で、南に行くに従い少しずつ石や砂の肌色が混じり、南部は土と砂のまだらな肌色になる。そんなチュニジア南部を、2014～2015年にかけて3回訪問した。

就職で上京するまで日本の田舎の海と山に親しんで過ごした自分にとって、初めて見る砂の世界は大変刺激的であった。チュニジア南部を紹介したい。

ローマ時代の遺跡

首都チュニスから飛行機で南部の玄関口ジェルバ島に降り立った。長靴型のイタリア半島のつま先が真っ直ぐ指した方向にあるジェルバ島は地理的にもローマ世界の一部であり、ローマ時代の遺跡が残って

いる。

島と本土を結ぶ数kmの道はローマ時代に築かれたもので、少し海が荒れただけで分断されて帰れなくなるのではないかと心配になるような低さだ。畑や浜を歩くと、白い大理石の柱の基礎や床であったであろうブロック、石器の破片などがそこら中に転がっており、この辺りが遺跡であることに気付かされる。地上に立って見ると全く分からないのだ



写真1 ローマ時代の遺跡

が、これも衛星写真では競技場と思われる楕円形や神殿であったであろう四角の区画などが見て取れ、遺跡であることが分かる。

街の光景

本土に渡って真っ先に目にするのは、規則正しく植えられたオリーブの木が広がる畑と、石や岩がごろごろ転がる土漠の風景である。オリーブはヨーロッパに輸出する主要な



写真2 土漠の風景

農産物で、ヨーロッパで瓶詰めされるオリーブオイルの一部はチュニジア産で、現地で食べるものは味がまるやかでとても美味しい。重量があるため少々躊躇したが、お土産に持って帰ると大変喜ばれた。

メドニンの街は南部地域の交差点となる場所にあり、比較的人口が多い。街に入る前にまず見えるものは、路傍に並べられたポリタンクと漏斗と道路の黒い染みだ。これは近隣の国で安いガソリンを仕入れて屋台で売る簡易なガソリンスタン

ドラしく、国内価格の数分の一で買えるそうだ。かなりの量のガソリンが積み上げられており、引火しない街の中心地に向かっていくと、自動車の板金、雑貨、衣類、喫茶、飲食店、食料品などの様々な露店が並んでいる。ラクダの顔をぶら下げた店の横には生きたラクダがつながれており、顔はほとんど同じだ。通訳に尋ねると、精肉店が品質をアピールするために商品から切り離れた生首を展示しているとのこと。多少の違

和感があったが納得した。

和感があったが納得した。

観光

メドニンからさらに南に向かっていくとタタウィンに着く。いよいよ砂の世界だ。

タタウィンで特に有名なものはクサルである。クサルとは集落が共同で使用する穀物倉庫のことで、集落の崩壊とともに打ち捨てられているものが多いが、現在でも生活に適合して使われているものもある。収穫した穀物やオリーブを保存するための個人倉庫が集合したもののだが、当時の人にとって収穫物は大事な財産で、倉庫を山頂に建設し要塞化することで外敵から財産を守っていた。そのため丘の上に城のようにそびえ立つ様が美しい。

最近、人々が去ったクサルを訪問するため、麓から山頂に向かって歩いてみた。中腹には土葬で盛り上がった土と、その目印であろう錆びた缶がいくつも並ぶ墓地があり、そのさらに上には、横に掘られた複数の洞穴がある。この洞穴ではオリーブオイルの圧搾作業を見ることが

できる。ローマ時代から変わらない、石臼と椰子の木を使った圧搾方法だ。この地域はわずかな雨も貴重な

この地域はわずかな雨も貴重な



写真3 山頂のクサル



写真4 畑の堰

資源であり、クサルに上って山頂から周囲を眺めると、山の傾斜から流れた水を堰止めて、少しでも畑に水を流そうとしている工夫がよく分かる。

クサルの中の個々の倉庫には軒の内壁に装飾が見られる。表札代わりなのか、それは手形や絵や文字など様々で面白い。外から見ると全く同じ倉庫だけに、他人の倉庫と間違えないためだろう。

クサルを巡って分かったことは、いくつかタイプがあることだ。多くは丘の上で誰も使用せずに修復されてようやく原型が分かるものだが、低い場所に設置されているものは現役で状態も良く、生活に馴染んでいる。これは当時要塞として使用していたものが、外敵に征服され生活が安定化していくに従って、その機能が要塞から大規模な倉庫や人々の集まる市場へと変わっていったことによる。

余談だが、このタタウィンは映画『スターウォーズ』のロケ地としても有名だ。実際に砂漠の星「タトゥーウィーン」の街として登場し、ロケ地となったクサルは現在ホテルとして営業されている。

縦穴住居の集落

『スターウォーズ』のロケ地としてもう一つ有名な場所がマトマタである。メドニンから西の内陸に入った高台の街で、沢山の縦穴住居がある場所だ。衛星写真で見るとこの集落にぽつぽつと穴が散らばっていることが分かる。地面に巨大な縦穴を掘って、さらに一室分の横穴を掘り進んで住居としている。縦穴一つにいくつもの横穴があり、そこで生活することで、地上からは住居があるように見えない。これもクサルと同じく外敵から守るための知恵であ



写真5 マトマタの縦穴住居

る。そして、この縦穴住居もやはりホテルになっている。暑い日には結構快適で、これなら冷房無しでも過ごせそうだ。

気候

日中、屋外に出ると周囲に日差しを遮るものが少なく暑い。乾いた地面から舞い上がる砂を吸い込み喉も痛い。滞在期間中、一度も雨に出会うことが無かったが、一日の最高と最低気温を確認するため毎日天気予報はチェックしていた。最高気温が40℃を超す日に水分補給を忘れると、2時間移動ただけでバテる。これで体調を崩した時は、水も食事もすぐに体から出て行ってしまい大変苦労した。最高気温が45℃を超えた日は、空気も自分もあまりに乾いていたせいか、車のドアノブに触れた時にビリッと静電気が発生して驚いた。

天気予報はほぼ毎日晴れマークなのだが、たまに見慣れない波のようなマークが現れる時がある。よく見ると「晴れ時々砂塵」と書いてある。砂塵の日はずっと違って空が

白い。舞う砂の量が少なければ特に気にならないが、酷い時は雨が降るのではないかと思うほど空が暗くなり、霧がかかったように視界が悪くなる。

塩湖

マトマタから西に進んだ所にジェリドという巨大な塩湖がある。この先さらに西に進むためには、この湖の中央を約50km真直ぐに突っ切らなければならない。ここを通る時に酷い砂塵に見舞われた。数10m先を走る車両すら全く見えない中、真直ぐに進む。もし前の車両がスピードを急に落したり、対向車が車線を見失ったりしてきたら一大事だ。このリスクは確かに事前に知っておきたい。砂塵に突入してからでは、停車しようにも湖の道には路肩も無く、とにかく前に進むしかない。諦めかけたところで急に視界が晴れた。そして湖の上で砂塵が切れ、雪原のような真っ白な景色が現れた。水がほとんど干上がった塩の地平線が広がる巨大な湖である。道の途中にわずかにある休憩所で車



写真6 ジェリド塩湖

を止め、道端の水を味見したが後悔するほど辛かった。

オアシスの街

ジェリド湖を越えてしばらく進むとトズールというオアシスの街に辿り着く。少ない面積で効率良く日光を得るために、デーツ(ナツメヤシ)、果樹、畑と、高さの異なる3種類の木をうまく配置して栽培する伝統的な三層農業が残っており、人々の生活を支えている。この農業を限られた土地の中で営むには、何よりも水が大

事である。砂漠の中の貴重な水資源を共有するため、人々は管理組織を作って運営した。時間単位で各人の土地に流れる水を制御しており、昔は管理員が戸板の開け閉めを手動で行っていた。

オアシスの外れからトズールの街が広がる。街の中心地には昔から人々が生活する旧市街(メディナ)がある。トズールの建物の壁面は特徴的で、レンガを積み上げて凹凸で模様を表現したピットマップ画像のようになっている。細い路地が入り組

んだ迷路のような街を、様々な模様の壁面を見ながら歩くのは楽しい。ヤシの木で作られた厚い木の扉をくぐって建物の中に入ると、路地とは反対に広々と間取りされた住居が収まっている。中を覗くと木を植えたり水を張ったりと、様々な空間があって面白い。

海外で業務に従事して

トズールの空港から首都チュニスに帰る日の夕方の搭乗便が遅れ、同じく待たされた現地の人達と食事をしながら過ごした。出発は夜になり、飛行機の窓から外を眺めると、深い藍色の夜空とべったりとした黒の大地の中にトズールの街の灯りだけが見分けられた。広い土地の中にあるオアシスは、海の中に浮かぶ島と似ていると思った。

海外の仕事は、新しい物事に会う度にその違いに驚きながら取り組んでいる。能力不足から困難な場面に出会うことも多々あるが、そこで出会った人達に助けられながらようやく前に進んでいる。どこであれ、生活する人々の中に入り、作り上げていくこの仕事に非常に魅力を感じている。



写真7 トズールのメディナ



写真8 建物の内側